



会 長 あ い さ つ

在外派遣教員経験者の果たす役割

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会

会長 大塚 雅夫

会員の皆様，いかがお過ごしでしょうか。平素より国際理解教育並びに海外子女教育の実践や活動にご協力いただき感謝申し上げます。

現在，アメリカのサブプライムローンでの経済危機から始まった世界同時不況が日本の派遣社員の解雇にまで発展し，日本も世界の情勢と関連していることを実感をもって学びました。

このような状況の中，私た

ち在外教育施設を経験し，又，現在派遣中の先生方が接している子どもたちを通し，国際社会の中で貢献できる，これからの日本を背負うための教育を実践することは，きわめて重要であると思います。

この広報誌は，お互いの励ましや今後の視野を広めるための貴重なものとなっていくと思います。これからも会員同士，お互いに高め合ってくださいませ。

在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

台北日本人学校派遣報告

平成20年度派遣
台北日本人学校
教諭 上山 修

初めに、台湾の様子を紹介したいと思います。2008年3月現在、台湾の総人口は、2298万人、人口密度は、1平方キロメートル当たり平均632人で、世界でも超人口過密地域に当たります。最も人口の多い都市は、台北（263万人）で、次が高雄（152万人）です。一般的に台湾と呼ばれていますが、正式には、「中華民国」が国号です。地理的には、中国の東南海岸から、160km西太平洋上、日本とフィリピンの間に位置します。面積は、約3万6000平方キロメートル、台湾本島の南北の長さは394キロメートル、東西は最も広いところで144kmです。九州より一回り小さい感じですが、気候面では、北部は亜熱帯、南部は熱帯に属し、7月の平均気温は、28℃、1月は14℃です。5月から9月まで続く夏は熱くて湿度が高く、日中の気温は27℃から36℃になります。（本当に暑いです。）

次に、学校の様子を紹介いたします。日本人学校は、台北市の中心から約12km北に位置する天母という街にあります。天母は、元々田園地帯であったらしいのですが、日本人学校、アメリカンスクール、ヨーロッパンスクールなどが設置されると、そこに通わせる外国人が多く住み着くようになったようです。全校児童生徒数は729名（平成20年4月現在）。小中併設校としては、世界で7番



目の大きさとなっています。学級数は、小学部が3クラス、中学部は2クラスとなっています。東南アジアにある日本人学校と同じように、国際家庭の子ども達が多い（約40%）ということが特徴の一つとしてあげられます。

今年度は、魅力ある学校づくりのために、「思いやりと自ら考える力をはぐくみ、心身ともにたくましい児童・生徒を育成する。」という教育目標を掲げ、派遣教員31名（管理職も含む）、現地採用17名、事務職員11名が力を合わせ、勤務に当たっています。学校行事などは、基本的に日本の学校と変わりありません。



運動会もあるし、遠足や修学旅行もあります。個人的に驚いたことは、課外（部）活動が盛んなことです。野球、サッカー、硬式テニス、バレー、バスケ、バドミントン、卓球、剣道、吹奏楽などたくさんの方が、保護者主催（これは日本とかなり違う）で、活動しています。普段の授業日はもちろん、土日曜日にも、グラウンドや体育館には利用者がたくさんいます。児童生徒はもちろん、保護者・教員の交流を深めるのにも役立っています。地域の行事である「ドラゴンボートレース」にも参加しました。



本校の特色ある教育活動としては、総合的な学習の時間を使っての「中国語」、「英語活動（英会話）」、「交流活動」を挙げるすることができます。中国語は、全ての児童生徒に対して、週に一時間の授業を行っています。日本語の上手

な現地採用教員が担当しています。英語活動（中学部：英会話）も、全児童生徒に対して、週一時間の授業を実施しています。さらに週に一時間は選択語学として、どちらかを学習することが出来ます。

次に交流活動についてです。現地校との交流を軸に現地理解教育を行っています。それぞれの学年が定期的に、子供達を本校へ招待したり、本校の生徒が現地校の授業に参加したりしています。

大分長くなりましたので、最後に台湾人々の様子を少し紹介してみたいと思います。来台してすぐに、尖閣諸島問題をきっかけとする落書き事件があり、緊張感がありました。それ以外では、本当に暖かく受け入れていただいています。親日的な方が非常に多いです。道に迷った時などには、片言の日本語・英語・中国語を交えて、必ず声をかけてくれます。コンビニ、レストラン、タクシーなどを利用して、身振り手振りでの会話になりますが、助けられたことが何度もあります。理由はまだ詳しく分かりませんが、先人の方達の台湾への功績や業績、日本製品の素晴らしさから、日本に対する感謝やあこがれと言ったものを肌で感じ取ることが出来ます。そんな時にあらためて派遣教員としてのサービスと責任について考えさせられます。学校での職務を全うすることはもちろんですが、台湾と日本の交流を深めることができるように、何か一つでもがんばりたいと思います。

南米へ赴任して

平成18年度派遣
リマ日本人学校
坪井 悟

平成18年度派遣教員として、ここ南

米のペルー共和国「リマ日本人学校」へ赴任して3年目を迎えました。リマでの生活も落ち着き、食べ物や水にも身体が慣れ、快適な生活を過ごせるようになりました。



アンデスの野生の「リヤマ」

赴任当初は、言葉の問題や習慣の問題、食べ物や水が、なかなか身体に合わず心配をしました。日本人がテロリストに狙われた国に住む対策が身につくにつれ、3年目を迎えると



コルカ渓谷の「コンドル」

少しずつその心配もなくなり、落ち着いた生活ができるようになりました。身体の健康と心の健康が教育活動をする上では大切なことと感じるこのごろです。ここペルーは、日本との国交が結ばれてから移民する方々が多く、100年以上の歴史をもっています。過去の大きな大戦を経験し日系人社会が存在しています。そんな歴史の中に、リマ日本人学校も、存在しています。現在在学している児童生徒の指導をすることが第一の目的ですが、学校を取り巻く環境を理解し、地域社会と関係を保ちながら教育することも大切なことです。赴任してから、日本人社会と日系人社会、そしてペルーの社会との関係を作りながら生活をしてきました。学校の授業で、総合的な学習の時間に「南米の歴史、ペルーを知ろう」を題材に、子供達と一緒に調べ学習を進めてきました。文化祭では、調べてきた内容を掲示物にしたり劇にしてステージ発表をしたりしてきました。子供と学習を進めていくうちに、自分自身、南米の歴史の深さやヨーロッパとの関わり北アメリカとの関係など疑問をもつようになり、南米に関わる世界史を学習するようになりました。この

学習が、総合的な学習の時間に役立ち、子供たちが南米ペルーに関して高い関心をもてたことへとつながったのです。

リマ日本人学校に通学する子供達は、日本人ばかりではなく日系人もいます。日本人家庭とは異なる生活環境、その環境で問題になることは「言語」です。子供の「言語」に関しては、指導の工夫をしています。しかし、ここ海外で日本人と日系人が共に学ぶ環境の中で、やがて子供一人一人がもつであろう「僕は何人?」「何人として生きていくの?」の問題があります。現に中学部の生徒は感じ始めています。何人として生き、母国語は何語を使うのか、そしてどこで、どのようにして生きていくのか。とても大きな問題を抱え、子供達が成長していることを実感している毎日です。

リマ日本人学校では、毎年、小学部1年生から中学部3年生までの全校児童生徒で、一泊二日の宿泊学習を行っています。リーダーは小学部の高学年児童。各班縦割りの学年の班を編制し活動します。中学部の生徒は、小学部低学年の児童の面倒をよくみます。低学年の児童も、実の兄弟のように中学部の生徒を慕っていきます。この学習は教育が本来もつ、「あるべき姿」がにじみでているように感じます。上級生が下級生の面倒をみる。大人がこどもの面倒をみる。先輩が後輩の面倒をみる。面倒をみるが故に、面倒をみられているものが、敬いや尊敬をもつ。学校教育の現場だけでなく、社会が求めていることではないでしょうか。ここリマ日本人学校の児童生徒から学ばせていただいたことです。



バンコク日本人学校から

平成20年度派遣
バンコク日本人学校
釜田 重徳

今年度、派遣されたバンコク日本人学校は、児童数2500人を越え、日本人学校のなかで、最大規模の学校です。現在も児童数の増加は続いており、今年度入学の1年生に至っては、11クラスにもなりました。このような学校であるため、『海外にあるから』という特色はもちろん、『大規模校だからこそ』といった特徴が大きく現れています。全生徒がそろった着任式・始業式、体育館に響き渡るその歌声は、まさに圧巻でした。

また、教員数も110人を超え、ちょっとした行事・活動でも、職員の分担や手順等を、詳細に打ち合わせしなくてはならないなど、煩雑な事も多々あり、それが忙しさを生み出す原因と思われることもあります。しかし、それだけの職員が無駄なく的確に動く姿には、組織としての完成度の高さを感じました。また、数多くの教師が日本各地から集められているからこそ、学ぶことも多々あります。理論に裏付けされた教育理念と教育のエキスパートとしてのプライドをもっている先生方に出会い、刺激を受け、新採に戻ったような新鮮な気分を味わいました。大げさではなく、毎日が勉強で、赴任から半年たった今でも、日々自分が成長しているように感じています。いつでも、どこかのクラスで、誰かしらが研究授業を公開しているというのが、この学校の実態です。



夏の職員研修旅行も、慰安というよりは研修のための旅行といった方が正確な表現に近いように感じました。タイ北部のチェンライにある現地校を2校

ほど視察し、実際、私も授業実践をしてきました。一昔前、全世界に流通するアヘンの70%を生産していたというこの地域は、貧しさと教育の不足から様々な問題を抱えていたそうです。それらを改善するために、教育に力が注がれるようになった、そんな学校でした。児童生徒の全てが山岳民族というこの学校は、1クラス50名ほどもあり、そこに電灯は蛍光灯2本だけ、といった日本から見れば恵まれているとは言い難い状況でした。しかし、教壇に立ち教具を取り出した瞬間から、目を輝かせ、興味深く耳を傾け、教師の周りに集まる姿からは、自分が教師であったことの喜びをもらいました。また、同時にこれほど教育に飢えている彼らに、自分にもっとできることはないものかと考えさせられる一時となりました。

このようなバンコク日本人学校を一言で言い表すならば、「修行の場」とでも言えばいいのでしょうか、仕事はきついです。毎日の新鮮な刺激にうれしくなる、そんな学校です。

マレーシア (クアラルンプール)

平成19年度派遣
クアラルンプール日本人学校
檜山 和寿

今回は、先日訪問したマレーシアの公立小学校についてその様子を報告させていただきます。私が訪問した学校は、殆どの児童がマレー系の子どもたちの学校です。(マレーシアにはマレー系、中国系、インド系、その他の人々が住んでいます。)

学校は7時30分から始まります。7時45分まで全校朝会があります。その後授業です。授業は60分授業で、

中学校のように教科の担当の先生が各クラスへ行って授業を行う形を取っています。そして7時45分から10時45分まで休み時間なしで、3時間授業を行います。その後マカントタイムといって食事の時間になり、子どもたちは学校の食堂で食事を取ります。マレーシアでは、1日に5回ほどマカンといって食事を摂るそうです。また、お祈りのため朝は5時30分頃には起床しているようなのでそのため学校の食事時間も日本と比べ早い時間になっているようです。マカントタイムは11時5分まであり、その後1時5分まで2コマの授業(休み時間はありません。)を行って下校となります。

マレー系の公立学校では道徳の時間はなく(マレー系以外ではもちろんあります。)コーランを学ぶ時間がその代わりとなっています。その授業では、コーランの意味を確認したり、コーランの一節を覚えたり、アラビア文字の勉強をしたりと、日本の道徳とは授業の様子は大きく違っていました。子どもたちが意見を言ったり、考えたりと



いった時間はあまりなかったように思います（全てマレー語とアラビア語だったため詳しくは分かりませんでした。が・・・。）後で改めて確認するとコーランの読み(暗唱)と意味をしっかりと学習することをメインに授業を行っているようでした。

それ以外で日本と大きく違うと感じた点は2点ほどあります。1点は、英語、算数、理科はオールイングリッシュの授業で行われている点です。もう1点は、クラスを成績順で構成しているという点です。この学校では1クラスだけ成績の優秀な子を集めたクラスを作り、それ以外は、同じレベルになるようにクラス編成をしているとのことでした。同じ公立学校でも全てのクラスを成績順で構成しているところもあると聞きました。

以上、簡単ではありますが、マレーシアの学校訪問の様子をレポートさせていただきました。日本と違う点も何点かありましたが、礼儀を重んじあいさつをしっかりとできるように指導している点は日本と同じでした。どこの国でもそういった点は同じなのかもしれないと思いました。子どもたちも気持ちのよいあいさつで我々日本人学校の教員を迎えてくれて有意義な1日を過ごすことができました。

「エジプト」に赴任して

平成20年度派遣
カイロ日本人学校
教諭 佃孝至

1 はじめに

カイロ空港に到着する直前、飛行機の窓から見たのは辺り一面、茶、茶、茶色の空模様。「これがエジプトなのか。」と思ったが、実はこの日に限って「ハムシーン」と呼ばれる砂嵐に見舞われた。自宅に向かうバスの車窓から

は、車の多さだけでなく、ロバ、馬、ラクダなども併走する異様な光景に度肝を抜かれ、不安な気持ちを抱えながらエジプトでの生活が始まった。

2 修学旅行を通して

小学部の高学年担当ということもあり、修学旅行の引率の機会を得た。バハレイヤ・オアシスという西方砂漠でのキャンプである。目的地に到着するまでの間に、エジプトという国の神秘さ、雄大さを目の当たりにした。

まず、黒砂漠。これまでいわゆる黄土色の砂漠地帯を走っていたかと思うと、辺り一面真っ黒な景色に変わる。玄武岩質の岩石が、ごろごろ落ちており、この地で太古に火山活動があったことを想像させた。

さらに車を進めていく

と、これまでの真っ黒であった景色がさらに一変。真っ白な世界が



広がり始める。白砂漠である。石灰岩質の岩石が長い年月の間に風と砂に削り取られ、彫刻の森のような幻想的な景色を作り出している。削り取られた岩石の形はキノコのようなであったり、ヒヨコのようなであったりと見る角度や影のでき方で様々な形に見える。一瞬、「ここは火星か、いや、月か…。」

という全くの未知の世界に入り込んだ感覚に襲われる。そして、白砂漠の雲一つない青空と白の奇岩の絶妙な組み合わせは、私の「美しい」という感覚を遥かに超えるものとなった。



3 終わりに

日頃は騒々しい生活を余儀なくされ

る，ここエジプト・カイロであるが，修学旅行を通して知ることのできたエジプトの自然の素晴らしさ，そして，5000年という学ぶべき歴史をもつこの国で生活できることを，今はただ幸せに感じている。本校に在籍する児童・生徒とともにエジプトを知り，経験し，学んだことを，日本の将来を担う児童・生徒達のために少しでも還元できればと考えている。

日本という国

平成19年度派遣
グアム日本人学校
芳賀 俊英

成田空港から3時間半。グアム島は，手軽な海外リゾート地として知られている。グアム空港から一歩外に出ると，そこはまさに南の国。強い日差しが肌を刺し，思わず空を見上げると太陽がまぶしく輝き，青い空に白い雲が浮かんでいる。視線を落とし前方を見ると，



これまた青い海が広がる。海までは1kmほどあるのだが，空港が高台にあり，空港のすぐ前から低い土地になっているので，まるで目の前が海であるかのように見える。観光に訪れた人々は，これからの楽しい何日間かに思いを馳せ，迎えるの車に乗り込んでいく。そのとき，空港の前に並んでいる国旗掲揚のための旗竿に気付く人は，どのくらいいるのだろうか考える。

グアム島では，至る所に国旗が掲げられている。島内を車で走っているとたくさん目にする。ホテルや官公庁，

日本人学校にももちろんある。大抵はアメリカ合衆国の星条旗とグアムの旗の2つを掲揚している。日本人学校では，日の丸を加えて3つの旗を掲げている。その中でも空港前の旗竿の数は圧倒的で，横一列に30本が並んでいる。星条旗とグアムの旗が交互に掲げられていて，とても賑やかである。

しかし，その旗竿の一番上で旗が翻ることは多くはない。私が赴任してきてからの1年数ヶ月の間の，半分ほどでしかなかったと思う。残りは「半旗」である。半旗とは「弔意を表すために，国旗などを旗竿の丈の半分ほどの位置に掲げること」である。誰に対しての弔意か。国民のために働いて亡くなった警察官や軍人の方々に対してである。グアム出身の兵士が，イラクで，アフガニスタンで亡くなるたびに，半旗が何週間か掲げられる。

今の日本では「戦争で人が死ぬ」ということが実感できない。ニュースで流れる戦場の話ほどこか劇場的である。しかし，ここグアムでは，それがすぐ隣にあることとして感じられる。この地で暮らしていると，その他にも感じさせられることが多い。例えば，飲み水は貴重であるということ。ここでは，お金を出して飲料水を買って，重いタンクを運ばなくてはならない。また，食材は貴重であるということ。日本と同じく海に囲まれた島国であるグアムは，食材のほとんどを輸入に頼っている。だから，新鮮な野菜が手に入らない。牛乳もタマゴも冷凍で運ばれてくる。買っても腐っていることがある上に，高価である。

この地にいると，スーパーで多くの種類の新鮮な食材が安価で売られている日本は，とても恵まれていると実感できる。しかし，外から見ると恵まれていると思えるが，中で暮らしているものにとっては当然のことである。この日本の状況を「当たり前」と思うことに，最近は危機感を感じるようになってきた。特に，子どもたちが何も考

えずにそれを享受していることにだ。
「おいしいものが食べられて当たり前。」
「便利な暮らせて当たり前。」
「この便利な世の中はあって当たり前。」
…。

この点について考えさせる授業を、
日本の子どもたちにしてみたい。「なぜ
おいしいものが食べられるのか。」
「この便利な社会があるのは誰のおかげな
のか。」
「水がただ同然で手にはいるのは当たり前
なのか。」
「平和もただで手にはいるのか。」

外側から日本を見る機会を与えられた
ことに感謝し、今後もいろいろなもの
について見て、聞いて、考えていき
たいと思う。

これまでの校内研究を振り返って

平成17年度派遣
在コスタリカ日本国大使館附属
サンホセ日本人学校 吉村 俊一

1. はじめに

平成17年の派遣開始から4年目と
なった。これまでも、海外で暮らす児
童生徒のために、全力を尽くしてきた。
と、同時に多くのことを学ぶことがで
きた。今回は、「現地の実情に配慮し、
且つ、現在の日本の教育を教授し、い
きいきとした子ども達を育てる」ため
にこれまでの行ってきた校内研究の概
要を振り返ってみたい。

2. サンホセ日本人学校の実態

現在のサンホセ日本人学校の実態を
知るには、ぜひホームページ ([http://
sjo-escuelaj.com/](http://sjo-escuelaj.com/)) にアクセスしてい
ただきたい。

ホームページからは、なかなか感じ
られない実情をあげてみたい。

- ① 児童生徒数の減少(平成20年
度からは、職員数も1名削減)
- ② 複式学級、複式授業の増加

③ 現地居住家庭(帰国予定のない
邦人)の児童生徒の割合の増加

④ 現地の環境等の変化

上記の現状の殆どは、これまでも、
また、他の日本人学校でも上げられる
事項であろう。

3. これまでの校内研究について

《平成17年度：資料集の再編集》

赴任最初の年の校内研究は、主に
「現地の環境の変化」に注目し、それ
までであった資料集「コスタリカ」の再
編集を行った。特に社会や理科、道徳、
総合的な学習等で活用が予想される副
教材であるため、現状に即した内容が
必要とされるものであった。

各カテゴリーを職員で分担し、全員
で推敲をした。入れ替わりの多い児童
生徒、そして、職員が、調べたいこと
をすぐに、気軽に調べられる資料集に
するため、さまざまな工夫を行った。
写真やチャートを増やしたり、日本と
比較したりした。特に、現地採用職員
の協力は大きかった。

再編集をとおして、限られた期間
(2~4年)の派遣となる職員にとっ
ても、コスタリカ共和国の歴史や変容
に触れることができたことは、成果の
一つであった。

《平成18年度：短詩による表現力の育 成》

平成14、15年度まで校内研究にお
いて行われた「表現力の育成(読む、
話す、書くことに重点を置いて)」を国
語科を中心に行われた。しかし、課題
のひとつに、現地居住児童生徒の日本
語力の不足があった。

ここでいう「日本語力」とは、日本
語によって生活・学習する力のことで
ある。現地居住児童生徒は、就学前は、
現地の幼児教育を受けている。また、
就学後も、スペイン語で生活する環境
が殆どである(保護者が国際結婚の場
合が殆ど)。

そこで、海外子女教育振興財団が主催する文芸作品展等の海外から出品している短詩に注目し、その創作を通して、表現力の向上を図った。

短詩作りでは、その型を指導することこそ困難であったが、言葉を吟味する上では、非常に効果的であった。また、文章を書けるようになった児童生徒にとって、伝えたいことを簡潔にそして、効果的に表現することを体験できた。さらに、海外で生まれ育った児童生徒ならではの感性をいかすことができ、個性を認め合えるひとつの活動とすることができた。

《平成19年度：補充学習による基礎的 基本的内容の定着》

昨年度は、いくつかのクラスが行っていた下校前の学級の時間におけるスキルアップ学習を学校全体の取り組みにすべく、研究した。新しい学習指導要領では、普通教科の時数増加など、学習の機会の増加も1つの課題として挙げられている。

各学年（クラス）における発達段階や児童生徒の実態に合った課題を短時間の中で効率的に且つ継続的に取り組めるよう試行錯誤された。はさみの使い方や定規での線の引き方から、英語による寸劇等、その範囲は幅広く、日本でも、活用できる様々な取り組みを考案、実践することができた。

《平成20年度：表現力を伸ばすための 個に応じた指導法》

本年度は、本校の大きな転換期となった。児童生徒数の減少（しかし、クラス数は1増加）に伴う派遣者数が1名削減された。よって、それまで芸能教科でのみ行われていた複式授業を普通教科の中でも行うことを強いられる事となった。つまり、1つの教室で異なる学年の授業が行われる。

言葉で言うのは簡単だが、これがなかなか難しい。少人数学級であれば簡単かと思いきや実はその反対である。

子ども達は、少人数学級に慣れているので、自分で学習を進めることにあまりなれていない。つまり、教師の目が離れたところで、自ら学習を進めることにまったく慣れていなかったのである。

こうした実態を踏まえ、国際的な児童生徒の育成を目指すなかで必要とされる表現力を伸ばすための個に応じた指導法を研究している。それは、児童生徒の学習の進め方も含めてである。現在、私自身、小3・4の複式学級を担当し、国語、算数の複式授業を行っている。

様々な到達度の、児童生徒がいるのは、日本でも同様である。本年度の研究も日本で活用できる大きな取り組みとなるだろう。

4. 最後に

通常3年で帰国する派遣職員が多い中、4年目を経験する機会を得られた。派遣年数と相反し、最年少という状況の中、4年目ということもあり、教務を担当することとなった。

様々な経験をもち、違った教育体制の日本各地から派遣された諸先輩方との1年間は、きっと実のある1年となるだろう。

現地で日本の教育を望む児童生徒、そして保護者の願いに応えられるよう残された任期を全力で取り組んで生きたいと、この文章を書きながら改めて思う。



担当クラスの小3・4
名づけて「ラッキー7」



国語の複式授業
小4（手前）を指導中，小3（奥）は，自分達で学習を進めている



七夕集会に向けて
笹の葉にみんなで飾りをつけ終わり記念撮影



小3 社会科
校外学習の発表（全校帰りの会にて）

茨城県の壮行会のお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会の壮行会が下記の通り開催されますので，皆様お誘い合わせの上，ご参加下さいますようお願い申し上げます。

記

- 1 日時 平成20年3月7日（土）
14：30～ 受付開始
15：00 開会
- 2 場所 ホテルグランド東雲
〒305-0034
茨城県つくば市小野崎488-1
TEL.029-856-2211
- 3 問い合わせ先
つくばみらい市立小絹小学校
教頭 豊島 豊（本会事務局長）
連絡先 0297-52-3008



広報・研修担当者よりのお知らせ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会では、年2回広報紙「SECO」を発行しております。毎年第2号は雑感的なものをまとめたものです。帰国した会員や在外教育施設に派遣されている会員の現状を知ってもらい、情報交換をするためには、意味のあるものです。しかし、これだけにとどまらず、毎年第1号では、海外での現地理解教育・国際理解教育や日本での国際理解教育について、広く原稿を募集し、会員やその他の皆様の教育に資するものを作成したいと考えております。そこで、下記の通り現地理解教育・国際理解教育に関する原稿を募集いたしますので、応募をお願いいたします。

記

1 内容(研究テーマ)

- ①在外教育施設や国内の学校で行った現地理解教育・国際理解教育に関する研究
- ②派遣国理解に資する資料(自分でまとめたものに限る)
- ③外国人児童生徒の日本への適応に資する研究(生活指導や日本語指導も含む)

2 応募資格

- ・本会会員及び会長が認めたもの

3 応募規定

(1) 応募条件

- ①未発表の論文や研究に限る
- ②1人一篇とする。共同執筆も可。

(2) 形式・タイトル等

- ①論文作成に当たっては、パソコンで「一太郎」もしくは「ワード」を使用のこと(手書き原稿は不可)。

- ②A4用紙使用、縦置き・横書き(40字×50行)とする。

- ③論文の構成は、表紙・要旨・本文とする(但し、それぞれ別葉にすること)。

- ④表紙には、次の事項を記載のこと。

ア. 研究テーマ

イ. 氏名

ウ. 派遣国

エ. 派遣年度(※ 会員以外のは、ウ、エは記入の必要はありません。)

オ. 学校名

カ. 学校住所

キ. 学校電話番号

- ※ 共同執筆の場合は、代表者の後に「代表」と記入し、共同執筆者全員の氏名を記載すること。

- ⑤ 要旨は、2,000字以内とする。

- ⑥ 本文

ア 制限枚数

上記②の様式で10枚以内(図表、注釈、参考文献等含む)。

- ※ 表紙、要旨は、本文には含まない。

イ 参考・引用文献については、出典を明記のこと。

4 締切

- ・平成21年5月31日

5 提出先

- ・できるだけEメールの添付ファイルにて送信してください。

※ アドレス

kouhouibakai@yahoo.co.jp

- ・ Eメールで送信することができない場合には、下記住所までFD、CD-R等の記憶媒体に入力して送付してください。

※ 送付先

〒311-2423

茨城県潮来市日の出2-25-16

河嶋 賢一

TEL 0299-66-0870

6 その他

- ・ 応募者多数の場合は、茨海研のホームページのみの記載となることもあることをご了解下さい。

あ と が き

ここに、2008年度の広報誌第2号をお届けします。昨年からページレイアウトを変更しました。

ここ2、3年で広報部にも大きな動きがありました。

一つ目は、ホームページが立ち上がり、全海研のホームページからアクセスできるようになったことです。これは、柴田先生のご尽力があったからです。感謝に耐えません。

二つ目は、広報誌の発行が年に2回になったことです。第1号は、帰国された先生方や在外教育施設に派遣されている先生方が、国際理解教育を行うために資料となるべき原稿を記載しました。

日々の雑務に追われ、海外での生活が遠い記憶の彼方に去りつつある私にとって、この広報誌と毎月送られてくる「JICA MONTHLY」が、私と海外を結ぶ接点です。この広報誌

が、帰国された先生方には海外との接点に、そして在外教育施設に派遣されている先生方には、日本との接点になってくれればよいと感じながら編集しました。

広報誌は、下記のホームページアドレスでもご覧いただけるようになりました。興味のある方は、ご覧下さい。

ホームページアドレス - <http://www.zenkaiken.net/~ibaragi/>

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと思いますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。なお、Eメールでのご意見は、下記のメールアドレスまでお寄せ下さい。Eメールアドレス (kouhouibakai@yahoo.co.jp) (文責河嶋)